

# 農林水産大臣賞受賞

～棚田で人をつなぐ、棚田が時代をつなぐ～

おがわらいきたなだしんこうきょうぎかい  
受賞者 **小川地域棚田振興協議会**

かいそうぐんきみのちょう  
(和歌山県海草郡紀美野町)

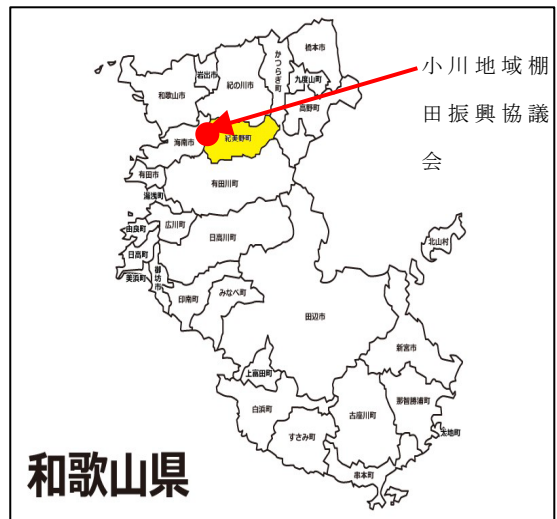
## ■ 地域の沿革と概要

和歌山県紀美野町は、県北部に位置し、人口は7,731人、総面積は128.34km<sup>2</sup>で、うち森林が75%、農地が10%を占めている。

小川地域は紀美野町の西部に位置し、高野山と熊野古道を結ぶ街道沿いの集落として栄えた交通の要衝であったとされ、また、緑あふれる里山・森林、美しい高原と清らかな水の流れる川に育まれた自然豊かな地域である。世帯数は約350戸、住民は約800名で、歴史保存会をはじめ充実した組織が活発に活動するなど、地域活性化のエネルギーが感じられる地域である。

本地域は600年以上前には棚田が存在したことが高野山文書に記載されている「中田の棚田」が広がり、棚田へ引水する用水路の一部は竜王水と呼ばれる手堀の水路であり、長い年月をかけ、地域の風景や、固有の伝統・文化が育まれてきたが、時代の流れとともに担い手は減少し、耕作放棄地が増加してきている。

第1図 位置図



## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

紀美野町まちづくり推進協議会においては、棚田地域振興法の成立以前から、棚田の保全の重要性に気づき、保全の在り方等について検討を進めていた。また、棚田法の成立を追い風として、その検討を深化、発展させ、「貴重な国民的財産である棚田を保全し、棚田地域への持続的に寄与する」

(棚田法第1条)を目的に真摯に取り組み、「小川地域棚田振興協議会」(以下「協議会」という。)を設立して着実に復田を進めている。

第1表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	旧市町村単位の集団等	
組織の性格	機能的な集団等	
人口等	総人口	746人
	総世帯数	340戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数	337経営体
	個人経営体数	335経営体
	団体経営体数	2経営体
	(内、法人経営体数)	1経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積	12,800ha
	耕地面積	755ha
	田	190ha
	畑	565ha
	耕地率	5.9%
	一経営体当たり耕地面積	2.2ha

資料：世界農林業センサスを基に整理

また、復田しても長く耕作放棄地であったことに起因して、稲の作付けができない場合等、多くの困難に対応する必要があり、地権者や地元住民の理解を得つつ、棚田サポーターズをはじめ、地域おこし協力隊、農家、地域住民、移住者、紀美野町、和歌山県等協力を得ながら、棚田地域の原風景を取り戻し、棚田地域の持続的発展に寄与する取組を継続している。

さらに、和歌山大学が行う地域連携プログラムを通して学生の活動を受け入れ、棚田保全活動に参加してもらっている。また、棚田サポーターズには女性も多く参加、活躍することでアットホームな雰囲気を作り出し、コミュニティ形成に重要な役割を担っている。

## 2. むらづくりの基本的特徴

### (1) むらづくりの動機、背景

歴史ある地域の棚田も過疎化、高齢化によって、耕作放棄が進み、水田は雑草だけでなく、樹木や竹なども生え、畦畔が崩れる等、農村の原風景が失われつつあった。

また、「中田の棚田」では、農地面積約9haのうち約3/4が耕作放棄地となり70年前には50戸あった農家も、高齢化により現在は水稻農家1戸、果樹農家2戸と後継者不足が深刻である。



写真1 「中田の棚田」全景

紀美野町は、観光振興と地域づくりを目的として平成18年「紀美野町まちづくり推進協議会」を設立。これまで町民が全く注目していなかった「中田の棚田」の景観が素晴らしいとの声が移住者等から多く聞かれ、それをきっかけとして、「この棚田を次世代につなげるためには、どのような対応が必要か」として、平成30年頃から再生活動について検討が始められた。

また、令和元年12月に「中田の棚田」が、棚田地域振興法に基づく指定棚田地域に認定され、地域の方々と一緒に棚田についての理解を深めるため、大学教授などを講師に勉強会を開催した。

このような検討や、棚田地域振興法の成立を追い風として、まちづくり部会のメンバーや棚田を再生したいという思いを持った人々が集まって、棚田再生に向けた活動と地域活性化を目的とした「小川地域棚田振興協議会」が令和2年2月に設立された。

### (2) むらづくりの推進体制

協議会は、会長を中心に、棚田の保全に携わる地域住民や他の地域団体の代表等28名の会員で構成され、農業振興の分野に留まらず観光や教育等幅広い分野の団体が参画している。

棚田の保全は、会長、役員、地域おこし協力隊が中心となり、棚田を介して様々な人・情報・モノ・コトが行き交う交流拠点を目指して、協議会の設立目的に賛同頂ける団体の輪が広がり現在の体制となっている

情報・モノ・コトが行き交う交流拠点を目指して、協議会の設立目的に賛同頂ける団体の輪が広がり現在の体制となっている。

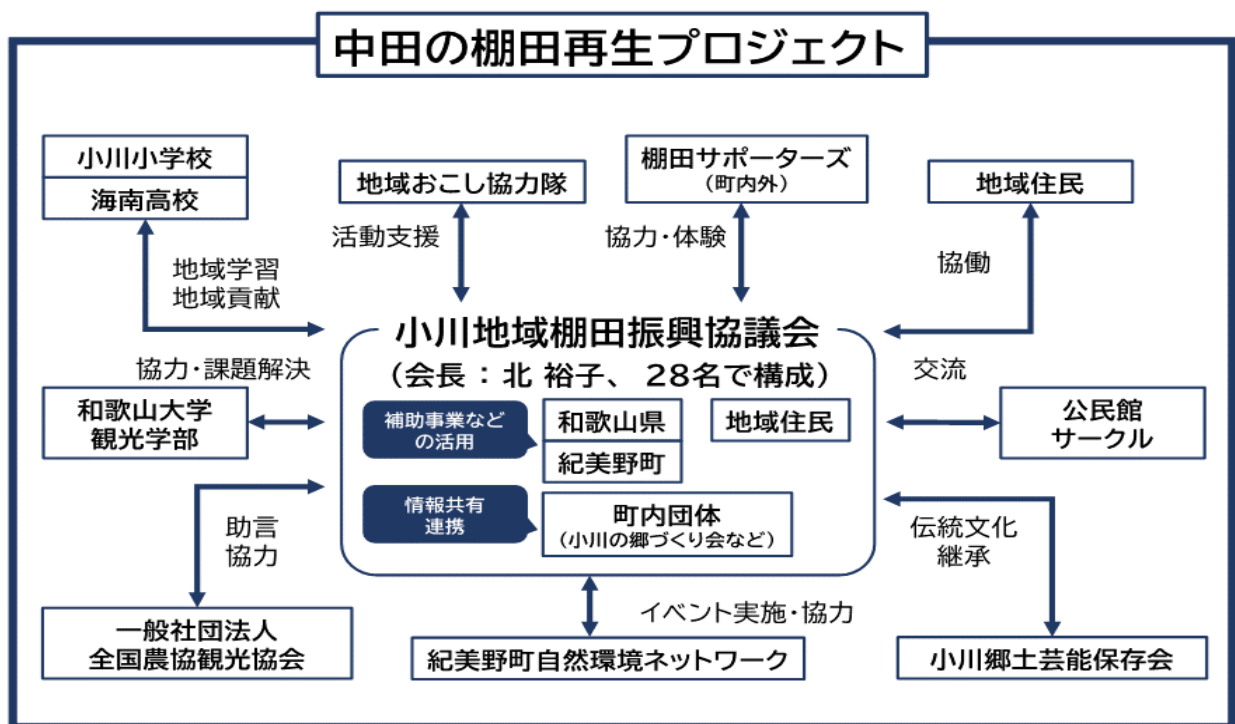
また、毎年中田地区の総会に参加し、今後1年間の事業計画等を説明することで地元住民との連携・調和を図り、情報交換などを行っている。

更に、年4回発行している「中田の棚田だより」は小川地域全戸へ配布、それ以外は回覧することで、広く周知している。



写真2 中田の棚田だより

第2図 むらづくり推進体制図



## 業務の役割分担

<b>農業</b>	お米づくりの段取り、管理、農機械の整備など 【担当】 地域おこし協力隊+プロジェクトメンバー
<b>広報</b>	SNSの情報発信、地域広報誌作成、広報関連の窓口業務など 【担当】 地域おこし協力隊+プロジェクトメンバー
農業と広報を担当する地域おこし協力隊が協力して、ボランティアの活動日を設定したり、ボランティアの管理を行っている	
<b>イベント</b>	イベントの企画・運営 【担当】 プロジェクトメンバー
<b>教育</b>	教育機関との連携(授業・体験など)、教育旅行の調整など 【担当】 プロジェクトメンバー
<b>地域</b>	地域団体との連携、サークル活動、地域活動の調整など 【担当】 プロジェクトメンバー
<b>事務</b>	補助金申請、資料作成、総会の段取りなど 【担当】 紀美野町まちづくり課+プロジェクトメンバー

## ア 協議会と連携している各団体

### ① 棚田サポーターズ

令和3年3月から取り組んでいる登録制のボランティア「棚田サポーターズ」は、草刈りや耕耘等の棚田再生活動、米づくりや野菜の栽培等の作業を担当している。

その登録人数は年々増加しており、町内外、県外の方、子どもから学生、大人までの幅広い年代が参加し、令和6年の登録は約80名で、延べ400人が参加した。



写真3 草刈り支援の様子

### ② 紀美野町自然環境ネットワーク

紀美野町を中心に自然や生き物観察に関する活動とあわせ、棚田保全につながる農作業に関連づけたイベントを実施しており、関係人口の創出だけでなく、棚田サポーターズの新規獲得にも寄与している。

### ③ 和歌山大学観光学部

地域課題の解決に向けた活動や調査等に取り組むことで、観光振興や地域再生に関する実践手法について現場で学ぶ「地域連携プログラム」を実施し、SNSを活用した情報発信やイベントの補助、棚田サポーターズの一員として棚田保全活動への参加、ボランティアに関する意向調査、SNSを活用した情報発信に関する調査等、学術的な面での活動も実施している。また、活動に参加した学生の1人は卒業後も棚田保全活動に参加している。



写真4 成果発表会の様子

### ④ 海南高等学校

野球部員の地域貢献、地域学習及び食育推進の一環として、令和5年から活動に参加している。毎年約20名が、田植えから稲刈りまでの6回程度、米づくりや水田の復田作業などの活動に取り組んでいる。

### ⑤ 小川小学校

地域学習として令和3年から活動を開始し、地元の小学生にとっても棚田は貴重な学びの場となっており、協議会が講師となって田植え、田んぼの除草、稲刈り体験を提供している。また、棚田を天然のビオトープとして活用し、生物の多様性を学ぶ授業を実施している。こうした取組が発展し、令和7年度からは総合学習の一環として、棚田の多面的機能に関するテーマを学年ごとに設定し、体験と調べ学習として学校と協議会が協働して、学習の場を提供することとしている。

## イ 行政との関係

紀美野町は、協議会の活動を積極的に支援しており、協議会活動への理解を得るための棚田の地権者や地元住民への説明や、協議会の活動への助成も行っている。

また、町では「中田の棚田再生プロジェクト」に取り組む地域おこし協力隊を募集・配置しており、協議会と密接に連携し、棚田の保全、地域振興、情報発信なども担っている。町としては、棚田再生プロジェクトへの関与をきっかけに、関係人口・交流人口・移住希望者の獲得を期待している。

### ■ むらづくりの特色と優秀性

#### 1. むらづくりの性格

協議会は、令和2年に「中田の棚田再生プロジェクト」を立ち上げて取組の方向性等の協議を始めた。耕作放棄された棚田景観を復活させつつ、雑木除去や草刈りと、水田への再生の両方を並行して行うこととし、地域おこし協力隊、農家、地域住民、移住者、ボランティア等多様な者が多数参加できる体制を構築することとした。

また、耕作放棄地から再生した田んぼにおいて、農薬・肥料を使わない自然栽培の米作りを始めたが、広大な棚田を再生するには人手が足りず、令和3年3月には登録制ボランティア「棚田サポーターズ」を創設し、協議会メンバーとサポーターズで棚田の維持管理活動を行ってきた。

運営にあたっては定例会を定期的に行い、農作業計画、教育旅行の受入、イベント開催等の交流、関係人口の増加に繋がる各種取り組み方針を綿密に話し合っている。また、農業体験の教育旅行受入やイベントを開催するなど、観光資源化を図り、都市部との交流と併せて棚田の保全を進めている。このよ

うな取組が評価され、令和4年2月には、棚田地域の振興に取り組んでいる優良な棚田として、農林水産省より「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」に認定された。



写真5 中田の棚田再生プロジェクト



写真6 田植え体験イベント



写真7 収穫体験の様子

## 2. 農業生産面における特徴

### (1) 棚田の復田

高齢化等のため管理できなくなった棚田を、地権者に代わり協議会が管理することで、7ha あった耕作放棄地のうち、令和2年度に0.03haの復田を行い、令和3年度までには0.05haと着実に取り組み、令和6年度末までには約1.2haを復田したほか、約3.8haの草刈りを行うことにより棚田の景観を維持している。

また、令和7年度には計1.8haを復田することとしており、来年度以降も、畦畔の有無や水利条件等を考慮しながら復田を進め、徐々に耕作面積を増やしていくこととしている。



写真8 復田への流れ

### (2) 棚田での農作業の軽減及び棚田生産力の維持

協議会が棚田をまとめて管理することで、田植え機や畦塗り機等の機械の集約化と効率的な人員配置が可能になり、作業時間の削減につながっている。

また、農山漁村振興交付金（元気な地域創出モデル支援）の支援を受け、スマートフォンによる用水管理システムを導入するなど、スマート農業技術の導入による作業の省力化にも取り組んでおり、特に水位センサーの設置は、遠方からでもスマートフォンで水位を確認することができ、水管理の省力化が可能となった。

このほか、棚田の生産力を維持するためには法面管理も不可欠であることから、一般社団法人石積み学校の講師を招いて石積を実践するなど、棚田において永続的に活動するための取組も着実に進んでいる。



写真9 スマート農業体験



写真10 石積の修復技術体験

### (3) 水源の確保（竜王水の保全）

生石高原の湧水を集水している竜王水は、小川地域の棚田をかんがいする用水路で、全長約600mのうち現在も約200mが手掘りのまま残っており、中田の棚田及び隣接する梅本地区の棚田を長い間支えてきた。

竜王水は、江戸時代の1848年以降、約200年以上にわたり、地域の水資源を支えてきた貴重な土木遺



写真11 竜王水（水路）清掃活動

産であり、多くの農家が農業用水として使用していたが、高齢化により農家が減少し、2年前に水利組合は解散した。

現在は、その維持管理を協議会が引き継ぎ、棚田へ用水を供給する水路として利用するとともに、清掃活動や整備補修等を行っている。



写真 12 竜王水（水路）清掃活動を行う協議会及び地域住民

### 3. 生活・環境整備面における特徴

#### (1) 都市住民との交流、関係人口増加の取組

協議会は、棚田サポーターズのほか、海南高校野球部の地域との交流活動の受け入れ、小川小学校の田植え、草取り、稲刈り体験の受け入れを継続して行っている。

また、復田できていない耕作放棄地で棚田の大自然を楽しむ「棚田 deCAMP」、しめ縄・鍋敷きを作成する「稲わらワークショップ」、棚田で収穫されたばかりの野菜を使った味噌汁を楽しむ「収穫祭」などのイベントを開催し、都市住民との交流、関係人口増加のため積極的に取り組んでいる。



写真 13 しめ飾り作成の様子

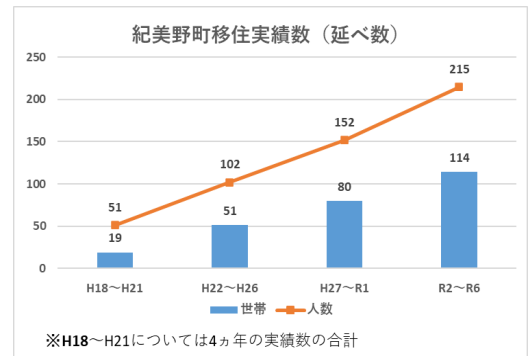
#### (2) 紀美野町定住促進への支援

紀美野町は地域おこし協力隊の受入を平成 22 年度から行っており、これまで「中田の棚田」の専属の協力隊員として 5 名が活動し、うち 3 名は任期を終えているが、全員が町内に定住している。

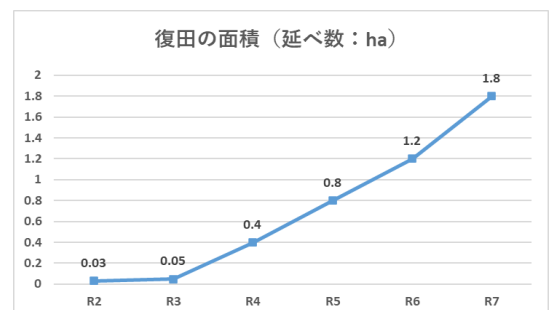
一方、町全域に共通する課題として、空き家が多く、町内に不動産業者がないため個人間での契約が必要であることや、仏壇があるため改修ができない等が挙げられる。

このため、県外や町外から移住してきた協議会員が、自分が移住する時に苦労した事や困った事、移住してよかった事等を、移住の検討を始めている棚田サポーターズ等にアドバイスするなど、移住を考えている人のサポートをすることで、新規移住者は年々増加傾向にある。

第 2 表 紀美野町移住者実績数（延べ数）



第 3 表 中田の棚田復田面積（延べ数）



#### (2) 女性の社会参画の促進、地域との連携等の取組

協議会は 2 名の女性が役員に就任しており、都市部でのサラリーマン経験を得て、1 名は農業、農産物の加工販売を行い、1 名は古民家の宿を経営している。棚田サポーターズの会員に農業体験をより楽しく実施してもらうため、トイレ・更衣室設置等の環境整備を

女性目線から提案し実施した結果、女性参加者が増加し、初めての農業体験者にも喜んでいただいている。

また、収穫祭における周辺の野山で自生する竹を使った炊飯や、餅つき大会の運営も積極的に支援し参加者から大変好評を得ている。このような女性会員の発想と努力、連帯は協議会活動に不可欠なものとなっている。

加えて、以下のとおり、協議会は棚田の再生のみならず、地域と連携した伝統文化の継承や次世代に続くむらづくりに取り組んでいくこととしている。

#### ① 伝統文化の継承

協議会は、文化の継承も目的の一つとして掲げ、当初より伝統文化である「梅中傘踊り」を継承していきたいと小川郷土芸能保存会に依頼するも、なかなか受け入れられなかったが、保存会メンバーの高齢化等により、令和5年に協議会員4名がメンバーに加わり、現在は保全会19名で地域の伝統芸能の保全・継承に取り組んでいる。

#### ② 次世代に続くむらづくり

紀美野町では、人口減少や高齢化、鳥獣被害や空き家の増加等の各種の課題があるものの、一方で、高齢者を中心に農産物や加工品の生産・販売等の取組や、移住者らによる飲食店の運営、産業の活性化等、住民が進んでむらづくりに関わっている。

若者は少なく都会的ではないが、美しい自然があり、協議会は地域を支え活性化に取り組む地域の人々と連携・協働し、次世代へと続くむらづくりを進めることとしている。